

農村集落部門：大野地区公民館（垂水市）

1 地区の概要

大野地区は、垂水市街地から東北東へ約13km、高隈山系の中腹、標高550mの中山間部に位置し、北西部には佐多ツツジの自生する高峠、地区内には3,000haの森林を抱える鹿児島大学農学部附属高隈演習林などがあり、自然が豊かな一方で、病院や学校がなく、最も近い生活関連施設まで車で約20分程度を要する地域である。

大正3年と昭和21年の桜島噴火による移住者や戦後の海外からの引き上げ者が、開拓事業により切り開いた地区であり、農業や生活、教育など全ての面において個人の力での解決は難しく地域全体で取り組むことが不可欠であったため、開拓時代当初に自治組織を設立し地域みんなて話し合い助け合って進める態勢を形成している。

養蚕や炭焼き、夏場の冷涼な気候をいかした高原野菜の栽培など開拓事業を着実に進めるとともに、昭和40～50年代に導入した各種基盤整備事業により、品質の高い茶生産、放牧等による生産牛経営など生産方式の近代化を図ることで経営を軌道に乗せ、現在では、農業を核とする緑豊かな台地を作り上げている。

開拓当初から受け継がれている、「何事も一致団結して取り組む」地域性を活かし、むらづくり活動を活発に展開している。

2 むらづくりの主な内容

地区住民が検討を重ねて策定した大野づくり計画にもとづき、**住民同士の強い団結のもと、地区外からの若い力の活用も図りながら、伝統芸能の継承や地域資源を活用した経済活動等**に取り組み、計画に定めた目標「**大野の人をふやしたい**」へ前進している。

農村集落の再生

大野地区は、桜島噴火による移住者や、戦後の海外からの引き上げ者による開拓地であり、非常に強い団結心が引き継がれている地区である。むらづくり活動にも活発に取り組んでいたが、過疎化により地区の学校が閉校し、同時に、公民館組織の脆弱化も進行していった。

そのような中、市の地域振興のモデル地区に選定されたことを契機に、地域振興計画「大野づくり計画」の策定等に着手。そして、同計画に定めた目標「大野の人を増やしたい」に向けて、伝統芸能の継承や交流イベント実施、加工品開発など様々な活動が展開されている。

多様な主体との連携

<若者の力を活用した伝統芸能の継承>

豊年祭りへの大学生の参加のほか、鹿児島大学の大学祭での棒踊り披露、一般向け棒踊り体験ツアー等を実施。外部からの参加も含めた伝統芸能継承に取り組んでいる。

<NPO法人との協働>

大野地区と交流を深めた大学生らが「NPO法人森人くらぶ」を結成。ソーシャルビジネス展開を目指し、地区住民と、農作業や特産品開発、体験活動の受入れ等に取り組んでいる。

新たなむらづくりの形成、むらづくりの維持・発展

<つらさげ芋のブランド化による農業振興>

昔からの保存食「つらさげ芋」（冬の時期に、サツマイモを軒先に下げて寒風に晒したものを）を地域特産品として取り上げ、平成22年から、つらさげ芋や地域農産物を直売する「大野原いきいき祭り」を開催。毎年約1,500人の来場者で賑わい、農家の所得向上や地区への誇りの醸成に繋がっている。つらさげ芋のニーズに対応するため、サツマイモの生産拡大や、持続的な生産体制づくりに向けた取組も始まり、地域農業の振興が図られている。

<女性の参画>

地域の女性が6次産業化に取り組み、直売所への出荷や、イベント時等の食事提供等を実施。地域内でお金が循環する仕組みが構築されている。また、公民館活動においても、女性が運営委員として方針決定過程に参画し、むらづくり活動に女性の視点が活かされている。

<若者の移住>

NPO法人森人クラブの関係者や芸術家など、9人の若者が移住。伝統芸能の継承活動や地域のイベント「大野原いきいき祭り」への参加、大野づくり計画策定委員への就任など、むらづくり活動にも積極的に携わり、地区へ活気をもたらしている。

3 今後のむらづくりの方向性

大野において「人を呼び込み、人を増やす」ことを目標に、広大な演習林を利用したトレイルランなどの自然体験活動の展開や高隈山のPRや観光客向けのビジネスなど、これまで住民のボランティアにより支えられてきた活動に、ビジネスの視点を取り入れたソーシャルビジネスへの発展など、大野に住む住民が農業を核に安心して暮らせるよう、今後も開拓魂を持って取り組む。

<活動状況写真>



伝統芸能・棒踊りの継承（大学生も参加）



NPO法人森人クラブ（大野地区でのサツマイモ収穫）



地域特産品・つらさげ芋



大野原いきいき祭り